

『山上宗二記』における茶湯の「道」の概念について — 「一道」「楽道」「御数寄道」「此道之奥之奥」に着目して —

吉 慶

(広島大学人間社会科学研究科博士課程後期 3 年)

先行研究—中世における「道」

哲学的な立場から中世の茶湯を考察する研究として、『利休の黒—美の思想史』（尼ヶ崎彬、花鳥社、2022 年）が挙げられる。

『利休の黒—美の思想史』は、茶湯の歴史を遡り、茶湯の思想を考察する。その中、第四章「『山上宗二記』のストーリー—「秘伝と禅」」は『山上宗二記』における茶湯の思想を考察する。具体的には、「1 茶の湯の起源」、「2 貴賤同座と名物所持」、「3 茶人の分類」、「4 珠光一紙目録」、「5 茶の湯の様式の変化—数寄の流行」、「6 義政と珠光」という六つの節がある。興味深いのは、「道」の理念についての解釈である。「2 貴賤同座と名物所持」には、「中世にはさまざまな技能を求められる分野が「道」として意識されるようになった。それは職業としての専門技術というより、趣味として何かを追求することであり、つまりは「数寄」と呼ばれた分野でもある」¹⁾と記されている。「中世」について、尼ヶ崎は具体的に説明していないが、恐らく 11 世紀後半（平安時代後期）から 16 世紀後半（戦国時代後期）までを指しているであろう。

以上の記述からは、中世において、道はある特定の分野の職人の技術にとどまらず、個人の趣味として風雅に心を寄せる人々に広がりを見せていったことがわかる。それは「数寄」という領域に相通している。さらに、彼は、「道の世界に入れば、世俗の身分が高くとも初心者は先達の指導を受けねばならない。

たとえその先達が庶民であったとしても。つまり身分の貴賤はない。ただ、道をどこまで行ったかのレベルの上下はある。それは仏道や芸道のルールである」²⁾とし、道の世界では、世俗の身分の上下に関わらず、道をどれほど貫徹するかが重要な評価指標となるという。茶湯の場合、亭主は客人と同じく、小座敷で茶湯の精神性を感じ、道の世界を追究する。

本研究（第一章、第二章）では、この尼ヶ崎の論に基づき、『山上宗二記』における「道」の用例を考察した上で、「道」の概念をさらに詳細に定義しようと試みるものである。『山上宗二記』では、「道」の用例は13回（固有名詞、人名を除く）現れる。以下にテキストの原文を引用する（使用テキストは『山上宗二記 付茶話指月集』（熊倉功夫、岩波文庫、2006年）、頁数については引用文の末尾に示す）。

- ①「サレハ楽道之上者御茶湯ト申事御座候、南都皇明寺ニ珠光ト申者此御茶湯ニ卅ケ年抛ニ身上ニ一道ニ志シ深キ者ニテ候」（「道」は茶湯）（220 頁）
- ②「其次ニ件之升ケ条ノ様子其外孔子聖人之道モ学ヒ珠光ト相談之密伝口伝不レ残悉申上候」（儒学）（220 頁）
- ③「御同朋之流芸阿弥・相阿弥先師ヲ学、其後御物天下エ打乱下々之私物トス、今ニ不絶此一道、末世猶以繁昌也」（茶湯、師匠からの教え）（221 頁）
- ④「又唐物モ持チ目モ聞キ茶ノ湯モ上手右ノ三ケ条モ調リ一道ニ志深ケレハ名仁ト云也」（茶人）（222 頁）
- ⑤「但シ武辺隆正ニ宗易、宗及、拙子、名香ノ聞様相尋之時、右之十六種相極候、堺ニハ惣別香ノ道三人之外ハ知リタル者ナシ、京ニモ此四人也」（香道）（252 頁）
- ⑥「一 武辺隆正 名香ノ道名人也、紅塵一種ニ仕候、十年前ニ死去候」（香道）（252 頁）

⑦「但末代ニ正名香ナキカ、道捨リ候テカ」（香道）（253 頁）

⑧「一 茶湯者ハ無能ナルカ一能也ト紹鷗弟子共ニ云、注ニ曰、人間ハ六十雖ニ定命ニ其内身ノ盛成事ハ卅年也、茶湯ニ不斷染レ身サヘ何レノ道ニモ無ニ上手ニ彼是ニ心ヲ懸ハ悉下手之名ヲ可取、但シ物ヲ書文字計ハ可レ赦ト云々」（茶湯以外の道）（291 頁）

⑨「一 茶湯之師匠ニ別テ後、師匠ニ用ル覚語一切ノ上、仏法、歌道并ニ能、乱舞刀ノ上左、又下々ノ所作迄モ名人ノ仕事ヲ茶湯ト目聞トニケ条ノ手本ニ取也」（歌道）（296 頁）

「一、茶湯の師匠に別れて後、師匠に用いる覚悟、一切の上、仏法、歌道ならびに能、乱舞、刀のうわさ、また下々の所作までも、名人の仕事を茶湯と目聞きとニヶ条の手本に取るなり」（97 頁）

⑩「孔子ノ曰く……三十カラ四十迄ハ出ニ我分別ニ、習骨法普法度数寄雑談ハ坊主之伝ヲ仕、作分数寄ノ仕様ハ主次第也、但シ十ノ物五ッ我ヲ可レ出、是ヲ四十ニ而道ニ不迷ト云事也」（四十代の人生の道、儒学）（297 頁）

⑪奥書：「先年茶湯拙子ニ御談合之刻此道之奥之奥ヲ雖ニ御尋候ニ相伝ノ秘事ヲハ残シ候畢」（茶湯）（301 頁）³⁾

⑫「今度高野罷出候節、当安養院并成就院色々就ニ懇望ニ卅年之稽古ヲ漸三百日ニ令ニ指南ニ、師ヨリ被ニ申渡ニ通り一卷ニ仕、兩人ヘ渡候、然者、宗程様御数寄道御執心之由、粗承候間、此一卷進上候、惣別茶湯ニハ昔ヨリ以来無ニ書物ニ」（茶湯）（301 頁）

⑬「但宗易一人ノ事ハ目聞ナルニ依テ何事モ面白シ、平人宗易ヲ其儘似セタラハ邪道ト云々、茶湯ニテハ有間敷者也、但シ宗易ニ骨ヲ碎身ヲ碎カ、又ハ金銀ヲ山ト積カ、別而気ニ入タラハ、其上ニテ主ノ年比主ノ道具ノ様子、其身ニ似セ様々ニ茶湯可レ為ニ相伝ニ者也」（利休の茶湯を真似する道）（309 頁）

以上の13の用例において、②の用例には「其外孔子聖人之道」と記されており、この「道」は孔子の道、つまり儒学を指している。⑤⑥⑦の用例では、「道」は香道を指している。⑨の用例には「一切ノ上、仏法、歌道」としており、「道」は歌の道という意味である。こうした用例における「道」は茶湯を意味しているのではない。また、⑬の用例の「邪道」と⑧の用例の「ナレノ道」は茶湯以外の道を指しているので、今回の検討の対象外とする。

以上の「道」の用例を除外し、結局のところ、今回考察する茶湯の「道」の用例はすべて文頭（「道具論」迄の部分）と奥書にあり、併せて六回となる。具体的には、「一道」（①③④）、「楽道」（①）、「御数寄道」（⑪）、「此道之奥之奥」（⑫）といった用例であり、そこで語られる「道」を本茶道論の対象としたい。

第一章 「茶人論」

第一節 「茶人論」の諸概念

①と③については「楽道」に関連するテキストとして、筆者の他の研究で考察している。本章では、宗二の定義した「茶人論」の諸概念（④用例）を検討してみたい。宗二は茶人を「大名茶の湯」者、「茶湯者」、「佗数寄者」、「名仁」という四つの段階に分けている。以下に原文、読み下し文、各版の現代語訳を引用する。

原文

「古今唐物ヲ集名物之御厳リ全ク数寄人ハ大名茶湯ト云也、又目聞ノ茶湯モ上手ニテ世上数寄ノ師匠ヲ仕テ過レ身茶湯者ト云、又佗数寄ト云ハ一物モ不レ持者胸ノ覚語一ツ作分一ツ手柄一ツ此三ケ条調ル者ヲ云也、又唐物モ持チ目モ聞キ茶ノ湯モ上手右ノ三ケ条モ調リ一道ニ志深ケレハ名仁ト云

也」⁴⁾

読み下し文

「古今唐物を集め、名物の御蔵り全く、数寄人は大名茶湯というなり。また目聞きの茶湯も上手にて、世上数寄の師匠を仕りて身を過る、茶湯者という。また、侘び数寄というは一物も持たざる者、胸の覚悟一つ、作分一つ、手柄一つ、この三ヶ条調うる者をいうなり。また唐物も持ち、目も聞き、茶の湯も上手、右の三ヶ条も調おり一道に志深ければ名仁というなり」⁵⁾。

現代語訳

①竹内順一：「古今の唐物を収集し、名物道具の飾り自体をまるごと好む者は、「大名茶の湯者」という。また、道具の目聞ができ、茶の湯の点前が上手であり、世上、数寄の師匠として評判を得て、茶の湯を教授して身を立てる者を「茶の湯者」という。また、「侘数寄者」というのは、名物道具を一点も所持しない者であって、「胸の覚悟（胸中の決心）のみ」、「作分（創意工夫）のみ」、「手柄（功績）のみ」という三つの条件を満たした者をいう。また、名物唐物を所持し、茶の湯に適する道具を選別する力をもち、茶の湯の点前が上手であって、今述べた三つの条件を満たし、この一道（茶の湯の道）に深く志す人を「名人」という」⁶⁾

②渡辺誠一：「古今の唐物を集め、名物ばかりを飾って楽しむ人々を、大名茶の湯者と言う。また、目利きで、茶の湯の点前も上手にでき、茶の湯を教えて生活している師匠を茶湯者と言う。また侘数寄者と言うのは、これといった名物道具はひとつも持っていないが、胸の裡の覚悟がしっかり決まっていること、茶事の上で工夫を凝らすこと、茶人のこうした作意・作分が一世一代または後世にまで功績として遺るほどのこと、以上三箇条を備えた人のことである。また、名物の唐物を持ち、道具の極めも良くで

き、茶の湯も上手で、右の三箇条も備えており、更に数寄一筋の道（茶の湯の道）に深い志を抱いている人、これを名人と言う」⁷⁾

③水野聡：「目利きであり、茶の湯も上手、数寄の師匠をして世を渡る者を、茶の湯者という。名物を一物も持たずして、胸の覚悟一、創意一、腕前二、この三つの揃った者を、侘び数寄という、と。唐物を所持し、目が利き、茶の湯も上手。この三か条調い、一道に志深い者、これを名人という」⁸⁾

④筒井紘一：「古今の唐物を集め、名物の飾り付けをもって茶の湯のすべてだと考える茶人を「大名茶湯」ということができる。また、道具の良し悪しを見分ける能力があつて、茶会の趣向もうまくでき、茶の宗匠をしながら世間をわたっている人を「茶湯者」という。これという名物道具をひとつも所持せず、茶道に志す決意もしっかりとしており、茶会の作意もよく、客に賞められるような働きの三箇条のそろっている人を「侘数寄」者という。唐物の道具を持ち、道具を見分ける力もあり、茶会もうまく、侘数寄者としての三箇条もそろっており、さらに茶の湯へのこころざしも深い人を「名人」という」⁹⁾

以上の現代語訳を踏まえ、原文の初めの文章を検討してみよう。これらの訳語から、「大名茶の湯」者とは唐物名物の飾りを悉く好む人である、と理解できる¹⁰⁾。しかし、「名物の御厳り全く、数寄人は大名茶湯というなり」という熊倉の読み下し文には、全くの後に読点があり、次の「数寄人」が主語となって、古今の唐物ばかり集め飾ることを、「大名茶湯」と言う、という文意になる。しかし、翻訳例から分かるように、「全く」は副詞であり、「人」は名詞であり、その間の「数寄」は動作を表わす言葉であり、「古今の唐物を集め、名物ばかりを飾って楽しむ人々を」とひとくくりに捉える必要がある。それゆえ、「全く」と「数寄」の間に読点は必要ないものと思われる¹¹⁾。

次に、第二と第三の文、「目聞きの茶湯も上手にて、世上数寄の師匠を仕りて身を過る、茶湯者という。また、侘び数寄というは一物も持たざる者、胸の覚悟一つ、作分一つ、手柄一つ、この三ヶ条調うる者をいうなり」を検討してみたい。上で挙げた翻訳から、道具の¹²⁾目利きが上手くでき、茶湯¹³⁾の師匠として世間を渡る者を「茶湯者」と呼び、「侘数寄」とは、道具を持たず、一つの胸の覚悟、一つの作意（「作分」）、一つの腕前・技量（「手柄」）を備えた者を指す、とされる。この「一つ」は数量詞として、茶人における一つの資格と理解されている。また、「作分」は茶人の作意・創意¹⁴⁾を指し、「手柄」には「腕前・技量」と「功績」という二つの語釈があると辞書に記されている。「手柄」を「功績」と解釈する研究（竹内、渡辺、筒井：賞賛）はあるが、筆者は「手柄」を「腕前・技量」（水野）と訳することが適切だと考える。その理由を以下に示したい。

初めに、『山上宗二記』で用いられる「手柄」の他の部分を見てみたい。『山上宗二記 付茶話指月集』に次の一文がある。花入には「一、善き花瓶は、万草、悉く入るべし。また花の上手は、いずれの花も手柄次第なり」¹⁵⁾。ここからは、花入の上達者がどのような花を使うかは「手柄」次第だという。この「手柄」を「功績」と訳するならば、どのような功績か、花入には功績を積む必要があるかという疑問が生じる。それらの功績について、宗二は言及していない。

「茶人論」の「手柄」も同じく、茶人はどのような功績を積むか、功績がどのように計算するかという記述は、『山上宗二記』では見出せない。

さらに、『山上宗二記』に出てくる「手柄」について、「腕前・技量」と訳されるケースに対して、「功績」と翻訳される場合が少ない（「功績」に近い「人に賞賛される」（筒井）という訳も見いだせる）。この「手柄」を辞書で確認した際、『日葡辞書』・『古語辞典』（旺文社）・『古語大辞典』の中では、『古語大辞典』の語釈が最も詳しい。この『古語大辞典』によれば、「手柄」の項目には、

「①身についた腕前。手並み。技量。②技量が優れていること。優れた腕前。また、その者。③腕前を誇ること。自慢。④人に賞賛されるような立派な働き。功績……」¹⁶⁾と記され、①～③の解釈はすべて人の腕前・技量の意を表し、④が「功績」の意味となる。ただ、この部分には、「此度の手柄八弥なりと、いにしへの頼政・秀郷にもおとらじと、是を讃ざる人はなし」「本朝二十不孝・四・四」という例文が挙げられており、文末に「讃え」という言葉を見出すことができる。ところが、『山上宗二記』における「手柄」の用例では、他の茶人に賞賛されるという記述は見られない。したがって、「手柄」を「茶人に賞賛される功績」ではなく、「腕前」と解釈することがより適切であると考えられる。

最後に、第三の文、「唐物も持ち、目も聞き、茶の湯も上手、右の三ヶ条も調おり一道に志深ければ名仁というなり」について見ていこう。ここでいう名人（「名仁」¹⁷⁾）は、唐物を持ち、道具の善し悪しを判別でき、茶湯も上手であり、また「覚悟」・「作分」・「手柄」という三つの条件（「三ヶ条」）を備え、その上で茶湯の道に心深く志向した者を意味する。「名人」は「侘数寄」・「茶湯者」の条件を同時に備えているため、茶人の中で最も高位の存在であるとされる。それについて、「名人とは、茶の湯者と侘び数寄を合わせ、さらに名物所持者たる大名茶の湯も包含する、より高位な存在となる」¹⁸⁾と熊倉は説明している。

また、名人の最高の地位は他の記述（「茶人論」以外）から伺い知ることができる。例えば、『山上宗二記 付茶話指月集』には、「茶湯者の数寄者、古今の名仁というは珠光ならびに引拙、紹鷗なり。右この一卷大形は珠光の一紙目録の写しなり。その後、紹鷗追加せしめ畢んぬ。紹鷗遠行三十四年以来は、宗易先達なり。右の尊師に二十余年、問い置き候密伝、これを書き改め、今案などこれなり」¹⁹⁾という一文がある。この記述によれば、宗二にとって、珠光、紹鷗と引拙（村田珠光の弟子鳥居引拙）こそが「茶湯者」である同時に、「名人」と考えられていたことが分かる。とりわけ、宗二によれば、この『山上宗二記』

は、千利休の言葉・問究に基づき創作したものに、紹鷗が加筆したものとされる。このことは、また、「これ紹鷗の追加の判なり。その外、当代幾千万の道具、小道具まで、みな悉く紹鷗の目聞きを以って好み出さるるなり」²⁰⁾と記され、紹鷗が「名人」として、幾千万の道具を目利きし、茶道具の価値判断に影響を与えていたことが理解される。さらに、宗二によれば、「七十にして心の発する処に従いて法を越えずというは、宗易の今の茶湯の風体なり。名人一人の外は無用と云々」²¹⁾とされるように、「名人」である千利休の茶境が最高位であるため、他の茶人が模倣しないという。それゆえ、宗二が最高の師と仰ぐ利休（宗易）に先立つ茶湯の系譜である紹鷗、珠光、引拙こそが名人と称されたのである。

以上の説明を踏まえて、「名人」は『山上宗二記』の創作・道具の価値判断・茶人の茶境という三つの側面に影響を与えており、最高の存在といえる。

第二節 「名人」における「一道二志深」——最も重要な資格

本節では、前節に続き茶人の最高位である「名人」について、「一道」の概念に焦点を当て考察する。宗二によれば、先に示したように、「名人」は七つの条件を備えなければならないとされる。再掲してみよう。「侘び数寄というは一物も持たざる者、胸の覚悟一つ、作分一つ、手柄一つ、この三ヶ条調うる者をいうなり。唐物も持ち、目も聞き、茶の湯も上手、右の三ヶ条も調おり一道に志深ければ名仁というなり」と。

この「右の三ヶ条」は「侘数寄」者が備えている三ヶ条、つまり覚悟（「胸の覚悟」）、作意（「作分」）、腕前・技量（「手柄」）を指している。つまり、名人は、①唐物持ち、②目利き、③茶湯が上手であることに加え、三ヶ条である④胸の覚悟、⑤作分、⑥手柄を調べ、さらに⑦一道に志深ければ、名人といえとされる。

これらの諸条件の間の関係については、宗二は説明していないが、「茶人」の定義から伺い知ることができる。「名人」の①～⑥の条件は、「大名茶湯」者・「茶湯者」・「侘数寄」の素質でもある。①「唐物も持ち」は「大名茶湯」者の条件である。②「目も聞き」は「茶湯者」の条件である。③「茶の湯も上手」は「茶湯者」の条件である。「三ヶ条」、つまり④覚悟・⑤作意・⑥腕前は「侘数寄」となるための素質である。しかし、①～⑥に対し、⑦「一道に志深」は他の茶人の条件と重なっておらず、「名人」だけに求められる素質である。つまり、「一道に志深」は「名人」を他の茶人と区別する条件といえる。この点で、⑦の条件は「名人」にとって、最も重要な素質であるといえよう。以下に⑦の条件について、さらに検討加えてみよう。

「一道に志深けれ」の「一道」とは、茶人が心深く志向する茶湯の道を指し、「志深」は禅的な修行を貫徹しようとする心の持ち方や構えを意味する。すなわち、「一道に志深」は茶湯に向かう茶人の求道的な姿勢であり、そこには禅の思想を伴っている。『山上宗二記 付茶話指月集』によれば、「楽道の上は御茶湯と申す事御座候。南都皇明寺に珠光と申す者、この御茶湯に三十ヶ年、身上を抛ち、一道に志し深き者にて候」²²⁾と記されている。ここでは、珠光が三十年間に渡って茶湯に専心したことが「一道に志し深き」とされており、この「一道に志し深き」こそが「楽道」の核心と捉えられている。珠光は、先に見たように、引拙・紹鷗とならび、「茶湯者の数寄者、古今の名仁」²³⁾と評される茶人であるが、その珠光を「名人」たらしめているのがまさにこの「一道に志し深き」ことである点がここに示されているのである。この点で、「一道に志深」は「楽道」の核心であり、「名人」たらしめる資質を指すものといえる。

ただ、「一道に志深けれ」における茶人の心の持ち方である「志深」も茶人が志向すべき「一道」も、いずれも抽象的な概念であり、言葉だけでその内実をつかむことはできない。茶人がどのような道（修行の対象）を、どのように修

行（修行の方法）するかは、書物・言葉で説明されず、禅の本質に関連する内容といえる。恐らくこの理由で⑦の条件は、「名人」しか到達できない精神の領域だと思われる。

以上のことから、「一道に志深」は「名人」に不可欠な条件であり、他の「茶人」水準から「名人」を区別する修行心を示す禅的な思想であると思われる。この「一道に志深」は、茶における「道」を語るに際し、欠かすことのできない観点といえるだろう。

第二章 「奥書」における「道」の用例

第一節 「道之奥」と「数寄道」—茶湯の本質を指す

『山上宗二記』の文頭（「道具論」迄の部分）には、「惣別、茶湯風体、禅宗よりなるにより出で、悉く学ぶ。大形、口伝密伝にいい渡すなり。この儀によりて書物は無しと、奥書にのせ候なり」²⁴⁾と記されている。引用文中の「この儀」は、「惣別……」以降の記述、つまり「茶湯風体、禅宗よりなるにより出で、悉く学ぶ」と「大形、口伝密伝にいい渡すなり」を指している。つまり、茶湯の風体は禅宗から出て、悉く禅宗を学び、また口伝・密伝によって伝えられる、という。しかも、この一文では、書物に依拠しないという茶湯の本質について、奥書に載せることが示されているのである。そこで、本章では、「奥書」における茶湯の「道」の用語についてさらに踏み込んで確認してみることにする。関係の文を以下に引用してみたい。

⑪「先年茶湯拙子ニ御談合之刻此道之奥之奥ヲ雖ニ御尋候ニ相伝ノ秘事ヲハ残シ候畢」²⁵⁾

読み下し文

「先年、茶湯拙子に御談合の刻、この道の奥の奥を御尋ね候と雖も、相伝

の秘事をば残し候い畢んぬ」²⁶⁾

⑫「今度高野罷出候節、当安養院并成就院色々就_ニ懇望_ニ廿年之稽古ヲ漸三百日ニ令_ニ指南_一、師ヨリ被_ニ申渡_ニ通り一卷ニ仕、兩人へ渡候、然者、宗程様御数寄道御執心之由、粗承候間、此一卷進上候、惣別茶湯ニハ昔ヨリ以来無_ニ書物_一」²⁷⁾

読み下し文

「今度、高野罷り出で候節、当安養院ならびに成就院、色々懇望に就きて、二十年の稽古を漸く三百日に指南せしめ、師より申し渡さるの通り、一卷に仕り、兩人へ渡し候。然れば宗程様、御数寄道御執心の由、粗ら承り候間、この一卷進上候。惣別、茶湯には昔より以来、書物は無し」²⁸⁾

引用した⑪の文は、先年、茶湯について相談した際に、岩屋寺の住職・快慶²⁹⁾が宗二（「拙子」）に茶湯（「この道」）の奥義を伺ったが、（今のところ）茶湯の相伝の秘伝書を書き残した（これを手始めに参照しなさい）という内容である。

「この道」は⑫「御数寄道」の「道」と同じく、茶湯の道を指している。⑫の文では、宗程は茶湯の道に執心し、茶湯を宗二に尋ねた際、宗二が『山上宗二記』を宗程に進上したことが語られている。⑪の「相伝の秘事をば残し候い畢んぬ」、⑫の「……この一卷進上候」が示唆する書物は、いずれも宗二が書いた『山上宗二記』を指しており、そこに茶湯の奥義が示されていること伝える内容である。

しかし、「奥書」までの「茶湯起源」、「茶人論」、「道具論」、「十体」・「又十体」には、「奥義」や「数寄道」がどのようなものであるかをはっきりと示す記述はない。そこで、上で挙げた文の最後の部分「惣別、茶湯には昔より以来、書物は無し」が注目される。茶湯の奥義を知りたい者にはまず宗二の著作が示されたが、実は古来、茶湯の奥義に至るための「書物は無し」とされる。この意味

について、続く文章から考察を進めてみたい。

第二節 「惣別……」の読み下し文・現代語訳・語釈

茶湯の奥義について考察するに際し、重要な記述となる「惣別……」以降の原文、読み下し文、各版における翻訳を以下に引用しておこう。

原文（翻刻）

「惣別茶湯ニハ昔ヨリ以来無_二書物_一唯古唐物ヲ多ク見テ上手之茶湯者と節々為_二参会_一、作分出シ、昼夜茶湯ニ数寄覚語、之師匠也、此書物者为_二初心_一ニハ重宝之第一也、為_二数寄者_一ニハ不入者歟、古語ニ曰、修多羅教指月指、文字之言句敲門瓦子」³⁰⁾

読み下し文

「惣別、茶湯には昔より以来、書物は無し。ただ古唐物を多く見て、上手の茶湯者と節々参会をなし、作分出だし、昼夜茶湯に数寄覚悟、これ師匠なり。この書物は初心の為には重宝の第一なり。数寄者の為には入らざる者か。古語にいわく、修多羅教指月指、文字之言句敲門瓦子」³¹⁾

各版における現代語訳

①水野聡「一 そうじて昔より、茶の湯には書物はない。ただ、古い唐物を多く見覚え、上手の茶の湯者と常々参会し、創意を凝らし、昼夜茶の湯を好く心がけが、すなわち師となる。この書物は、初心の者には重宝である。しかし、数寄者には無益なもの。古語に曰く、「仏の教えは月を指し、文字を指すかのごとくである。言葉は門を敲く瓦である」。³²⁾

②竹内順一「一、結論からいえば、茶の湯を学ぶには、昔から書き物からではなく、ただ、古き唐物をたくさん見て、上手の「茶の湯者」と折りに触れて茶会を催し、作分（独自の工夫）をし、昼夜にわたって茶の湯を数寄

覚悟があることが、ほかならぬ茶の湯の師匠であります。一卷にまとめたこの書物は、初心者のためには重宝であって、それ以外の何ものでもありません。「数寄者」には不用のものです。修多羅教指月指、文字之言句敲門瓦子（修多羅の教えは、月を指し示す指、文字の言句は、門を敲く瓦子）」、すなわち、「經典は月（仏の教え）が見えれば、月を指す指ように不用であり、門を敲くための瓦片は、門が開かれれば不用となる」と、昔からいわれているように、茶の湯をマスターした者には、文字で書かれたものは不用になる、と喩えられている通りです」³³⁾

③渡辺誠一「総じて茶の湯には昔から（この道について記した）書き物などというものはなく、唯々、唐物名物を数多く己の眼で見て、上手の茶湯者と時折茶会を催してそれに参じ、創意工夫おさおさ怠りなく、昼といわず夜といわず茶の湯数寄一筋に専心の覚悟、これを措いて他に師匠は無いものである。この一紙目録は、初心者の為には極めて貴重なものではあろうが、数寄者には不必要のものでもあろう。古い経文にも記されているが、月を指さして教えると月を見ないで指を見る（月は佛の教え、指は佛の教えを表現した經典）譬えもあるように、物の道理を説いてもその本旨を認め得ずにその文言や言語に拘泥して詮索に耽るのが落ちであるから、所詮茶の湯などの場合、文言などというものは、奥義を究めんとして教えを乞うに当たり門を敲く瓦のようなものにしか過ぎない」³⁴⁾

④筒井紘一³⁵⁾は「奥書」の翻刻を示しているが、現代語訳を行っていない。

以上の解釈を踏まえ、まずは、「茶湯者」と「数寄者」の意味を見てみよう。「上手の茶湯者と節々参会をなし、作分出だし」という一文で現れる「茶湯者」は、「茶人論」における茶人の概念である。「茶人論」には「目聞きの茶湯も上手にて、世上数寄の師匠を仕りて身を過る、茶湯者という」³⁶⁾と記されるよう

に、「茶湯者」は道具の目利きの上手、師匠として世を渡す茶人を意味する。

「数寄者」は「茶人論」では見られないが、「初心の為には重宝の第一なり。数寄者の為には入らざる者か」と示されるように、「数寄者」は「初心者」の相対する茶人を指しており、上達者や熟達者と解釈できる。このことから、『山上宗二記』は上達者に向けていなく、初心者ための秘伝書であることが理解される。

次に、「昼夜茶湯に数寄覚悟」の「数寄覚悟」について検討しよう。熊倉と竹内は動詞を表わす「好く」この「数寄」の意と解し校注や翻訳に示している。それに対して、渡辺は「昼といわず夜と言わず茶の湯数寄一筋に専心の覚悟」と訳し、「茶の湯数寄」を名詞として扱っていることが分かる³⁷⁾。

ただ、この文は文脈上、師匠の話に当たり、そこに現れる「茶の湯」者・「数寄者」・「師匠」はすべて茶人を指しているため、この「数寄」を上手な茶人と解釈することが妥当であるように思われる。つまり、この見方に立つ場合、「数寄覚悟」は数寄者（上達者）の覚悟を意味していると理解できる。

上記の引用箇所においては「数寄者」や「茶湯者」、「師匠」の間の強い関連性をうかがうことができる。次節では、「茶人論」を振り返りながら、「師匠」の概念を確認しよう。

第三節 「師匠」の理念と特徴

「茶人論」での記述によれば、「大名茶の湯」者は唐物の収集した茶人であり、「茶湯者」は道具の目利きが優れ、茶湯の師匠として世間を渡る者であり、「侘数寄」者は①道具を持たず、②覚悟、③「作分」、④「手柄」を備える者とされる。

それに対して、「師匠」は「茶人論」における諸「茶人」の条件と関連しながらも、上で示した①から④のどれかに位置づく特定の「茶人」ではないと筆者

は考える。「古唐物を多く見て、上手の茶湯者と節々参会をなし、作分出だし、昼夜茶湯に数寄覚悟、これ師匠なり」³⁸⁾とされるように、上手な「茶湯者」の茶会に参加し、創意を凝らし、昼夜に開催する茶湯では、上達者の覚悟を持ち、師匠となることが語られている。つまり、師匠となる条件は「茶湯者」の茶会に参加し、そこから道具の目利きを学び、その上で「佗数寄」者の二つの素質、つまり②覚悟と③「作分」を備えることであり、茶湯の「師匠」は、唐物の所持（「大名茶の湯」者の条件）、目利き（「茶湯者」）、創意・覚悟（「佗数寄」）という諸「茶人」の条件を同時に満たしていることが求められるということになる。このように、「師匠」は「茶人論」の諸条件に限定されず、「佗数寄」の資質を持つ者であるといえる。

ここで、注目したいのは、「師匠」は「大名茶の湯」者と同じく、多くの唐物を見る者であるが、両者について言及する際の宗二の言葉遣いが異なっている点である。すなわち、「大名茶の湯」については「古今唐物を集め、名物の御厳り全く」³⁹⁾とされる一方で、「師匠」については「古唐物を多く見て、上手の茶湯者と節々参会をなし」とされている。

ここから、「大名茶の湯」者と「師匠」の違いを整理することができる。両者の差異はまず、唐物に対する態度として現れる。唐物を、「大名茶の湯」者は「集め」、師匠は「多く見」るのである。「大名茶の湯」の「集め」と「全く」は主体感情の意が表されているため、自身の趣味で名物を蒐集すると理解できる。それに対して「師匠」は「茶湯者」の茶会に参じ、そこにおいて多くの道具を目利きする。つまり、「師匠」は自身の趣味を出発するのではなく、茶会に目利きのために参じると考えられる。

両者の違いの二点目は、見る道具の違いである。「大名茶の湯」者の収集の道具は「古今名物」であるのに対し、「師匠」は「古唐物」（古い唐物）であり、つまり必ずしも名物ではない。なぜ「師匠」が「古唐物」を見るのかというと、

それは恐らく茶湯の上達者は古い道具への目利きを通して、内包される威光を見出し、茶境を追求するからであると考えられる。「時に非ざる物を眼前に御覧ぜらるるは、併し御名物の御威光か。その上、小壺、大壺、御花入、香炉、香合、御絵、墨蹟等、誠に案外の御覚悟にこびたる御遊びは、茶湯に過ぎたる事はあるまじき」⁴⁰⁾とあるように、茶人は「こびたる」道具から精神・感性（「威光」）を見出し、「案外の御覚悟」を得るのである。この「こびたる」は深みのある優れた道具を指しており、「師匠」の「古唐物」の意味と相通している。このことから、「大名茶の湯」者が単なる唐物趣味であるのに対し、「師匠」は唐物に秘められた精神・感性を追求する茶人として区別されると考えられる。

以上のように「大名茶の湯」者から区別される「師匠」の特徴を踏まえるなら、彼が初心者に伝えるのは、道具そのものや単なる唐物趣味ではなく、心の持ち方と覚悟であるといえるだろう。それゆえ、「昼夜茶湯に数寄覚悟」という表現について、師匠の覚悟は茶湯の時間（昼夜）・物質（道具）に限定されていないということも理解できるだろう。

では、「師匠」は具体的には何を伝えるのだろうか。そのことを理解するためには、「惣別……」中にある「修多羅教指月指、文字之言句敲門瓦子」について検討する必要がある。

第四節 茶湯の真髄——「師匠」が初心者に伝達するもの

本節では、宗二の引用した「修多羅教指月指、文字之言句敲門瓦子」の意味を考察する。まずは、第二節の文頭で引用した各版における現代語訳について確認しよう⁴¹⁾。

また、この古語については熊倉が以下に校註し説明している。

「修多羅は仏教典の意。経典の教えは月（仏の心）をさし示す指であるが、

それ以外の文字や書物は門を敲く瓦のようなつまらないもの」⁴²⁾

以上の熊倉の校註によれば、經典の教えは「月」ではなく、「月」を指している「指」である。そして「月」は仏の本質であり、茶湯の真髓を意味する。一方、「指」は「月」へ辿り着く経路、「月」の真髓を示す媒介、つまり仏典（文字・書物）に当たる。さらに後半では、その「指」としての文字・書物は「門を敲く瓦のようなつまらないもの」と解説される。ここからは、熊倉が「指月」の禅語を用いて、仏の道を歩む仏者が学ぶ書物や文字はある意味必要であるが、そこにとらわれていては真の仏の本質に近づくことはできない、ということが示唆される。つまり、文字や言葉は仏の「月」や門の中への経路（「瓦」）に過ぎず、仏の本質ではないことが語られているのである。

このように宗二は、禅仏教の本質を説く古語をそのまま茶湯に援用した。茶湯の道は、禅仏教のように、文字や書物の媒介に依拠せず心で伝達する、つまり「以心伝心」に本質を見出す。この「以心伝心」は「師匠」の精神性の核心であり、茶に生きる真の術であるといえる。

要するに、「惣別……」以降の文には、三つの内容に分けられる。第一は「師匠」の本質、つまり茶湯の思想の伝達である。師匠は道具を目利きし、覚悟・作意（「侘数寄」）に専念し、茶湯の思想を伝達する者である。第二は伝達方法、すなわち、言葉に依らず以心伝心であるという。第三は伝達内容、それは茶湯の真髓とされる。ここでは、茶湯の本質（「月」）が心から心に伝達されることになる（禅でいう以心伝心）。禅精神に基づく茶湯では、禅の書物や言葉（「月」を指す指）に拘泥する者は禅の本質（「月」）を得ることができず、本質は師の心から弟子の心へと響き合い、受け継がれていくものと考えられた。「月」は数寄者の覚悟につながり、茶湯の真髓である。茶人は媒介・経路・書物に拘束されず、心で茶湯の本質を直面し、心によって茶湯を理解し、また悟ることがで

きるといえる。

以上の月と指の関係を、心（精神）と物質の観点から語る次の一文を確認しておこう。「古人のいわく、茶湯名人に成りての果ては、道具一種さえ楽しむは、弥、侘び数寄が専らなり」⁴³⁾。この言葉は、「名人」は一種の道具に専念し、さらに媒介としての道具の「物性」を脱却し、「侘数寄」の禅境に入ることを意味する。存する「有としての物」は、存しない物に相対する概念といえる。「侘数寄」の境地では、「有としての物」、つまり可視的な次元を超えたところに、真の茶境を見出し得るとされる。この「物性」とする道具は、前述の書物・言葉・「指」・「瓦」と同じ単なる物質的な媒介であり、真の茶境はそうした可視的な次元を超えた心（精神）の次元において到達できるのである。

終章

結論一 「道」の概念

本研究では、「茶湯の起源」で示される「一道」・「楽道」という概念が、禅的修行における精神修養性との関連性において用い論じられ、それはさらに「御数寄道」・「此道之奥之奥」という概念を通して茶の湯の技術論へと昇華されることを解説した。終章では、これまでの考察を踏まえ『山上宗二記』における茶湯の「道」の用例（以下に読み下し文を引用する）に基づき、「道」の概念を定義してみたい。

①「されば楽道の上は御茶湯と申す事御座候、南都皇明寺に珠光と申す者、この御茶湯に三十ヶ年、身上を抛ち、一道に志し深き者にて候」

③「御同朋の流、芸阿弥、相阿弥、先師を学ぶ。その後、御物天下へ打乱れ、下々の私物とす。今にこの一道絶えず、末世なお以て繁昌なり」

④「唐物も持ち、目も聞き、茶の湯も上手、右の三ヶ条も調おり一道に志

深ければ名仁というなり」

⑪「先年、茶湯拙子に御談合の刻、この道の奥の奥を御尋ね候と雖も、相伝の秘事をば残し候い畢んぬ」

⑫「今度、高野罷り出で候節、当安養院ならびに成就院、色々懇望に就きて、二十年の稽古を漸く三百日に指南せしめ、師より申し渡さるの通り、一卷に仕り、兩人へ渡し候。然れば宗程様、御数寄道御執心の由、粗ら承り候間、この一卷進上候。惣別、茶湯には昔より以来、書物は無し」

①の「一道に志し深き」は、「楽道」の核心であり、この道は珠光の貫徹した実践の道とされる。④の「一道に志深けれ」も同じ文意を指し、ここでの「道」は名人の核心的な概念とされ、「茶人論」では最も重要な素質を意味する。これらの「道」は、ともに、修行の対象である茶湯の道を指しており、「志深」は禅的な修行の心の働きを指す。両者は抽象的な言葉や理論に拘泥しない修行・実践の道を意味するのである。そして、この茶湯の本質を「以心伝心」という形で初心者に伝達するのは、ほかでもなく、「師匠」なのである。

「一道」に「志深」することから見る禅的な修行の心に対して、③の「今にこの一道絶えず、末世なお以て繁昌なり」、⑪の「この道の奥の奥を御尋ね候」、⑫の「御数寄道御執心の由」で語られる「道」は茶湯の道を指しており、これらは文脈上、「師匠」と思想の伝授を説く際に語られている。具体的に③では、「今にこの一道絶えず、末世なお以て繁昌なり」という記述において、先達から受け継がれた茶湯の道は途絶えることなく、この末法の世においてなお繁盛している、と語られる。⑪と⑫の「この道の奥の奥」・「御数寄道」の文では、「相伝の秘事」、「茶湯には昔より以来、書物は無し」と語られるように、茶湯における「師匠」という伝達者、書物・言葉に依拠しない伝達の手段の意義が語られる。つまり、そこでは、「月」に向って「心から心へ（以心伝心）」伝達

する茶湯の道が語られるのである。

では、以上の考察を踏まえ、『山上宗二記』における「道」の概念を正確に記述することはできるだろうか。この著作では「道」は単独の哲学的概念として扱われていない。それゆえ、「道」の十分条件（特定の条件を満たすことで「道」と呼ばれる）を定義することは難しいものといえる。だが、あえて定義づけるとすれば、その「道」は個々の茶人における心の修行と、茶湯の真髓を意味するものとする。つまり、「道」は茶人が心深く志向する修行の道であり、「師匠」がつかみ伝える茶湯の真髓としての道であるといえる。それゆえ、「道」において、個々人の修行心と「師匠」の精神性が相即不離の関係にある。茶人は禅的な修行を通して師匠となり、また師匠としてその本質を伝達することになる。

こうした十分条件に対し、「道」の必要条件（「道」として備えるべき条件）を検討することも可能である。以下に、茶湯が「道」として成立するために満たす三カ条を挙げてみたい。

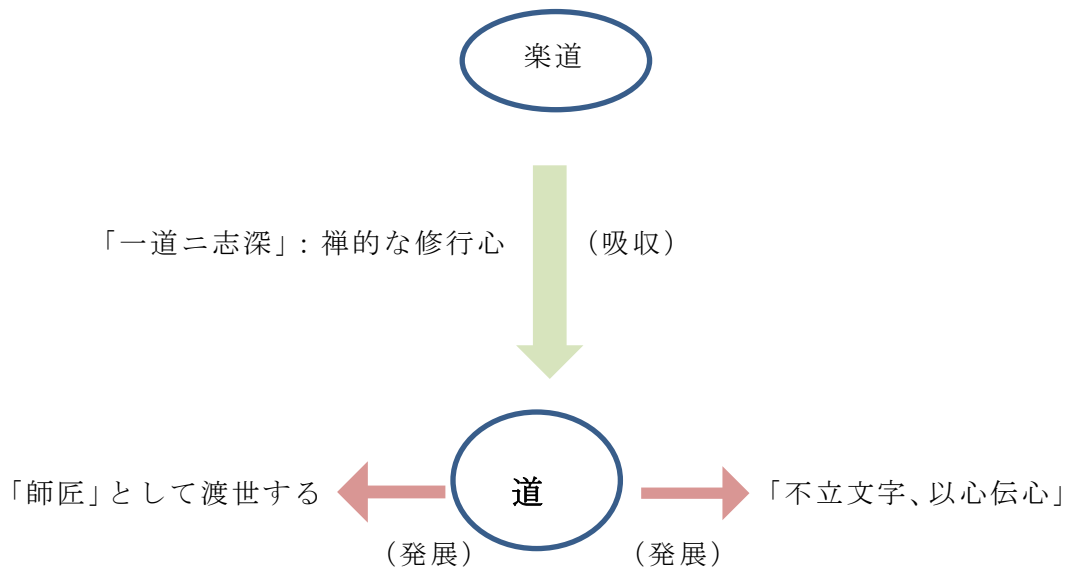
1、禅の「一道ニ志深」する修行心を持つこと。この修行心は「楽道」の思想である（用例①）と同時に、「名人」の重要な素質でもある（用例④）。

「一道」は「志深」と共に言葉に依拠しない精神的性質のものである。

2、物質上の媒介に依らず「師匠」によって伝達されること。師匠は「大名」・「茶湯者」・「侘数寄」の諸素質を備え、茶湯の思想を専念した者である（用例⑪⑫）。

3、師匠の伝達するものは、「指」・「瓦」（書物、言葉、方法）ではなく、真髓を表わす茶湯の「月」、つまり「物性」を脱却した精神域のものである（用例⑪⑫）こと。それこそ茶湯が「道」として繁栄してきた理由である（用例③）。

以上、『山上宗二記』における「道」の概念を定義した。この「道」は「楽道」と同じく茶湯のことを指しており、二つの概念を比較すれば、「道」は「楽道」の核心である禅的な修行の心を吸収していることが分かる。また、総合的な文化である「楽道」に対し、「道」は直接には「師匠」の精神と重なる禅の本質を指し、その伝達は「以心伝心」によるものとされる。茶湯における「道」について理解しようとするならば、「道」のこうした禅的性格を踏まえることが必須となるだろう。



結論二 先行研究における「道」への再検討

最後に、ここまでの考察を踏まえ、先行研究における尼ヶ崎の見解を再検討してみたい。

尼ヶ崎は、「道」について、「身分の貴賤はない」、「趣味として何かを追求すること」であると説明する。しかし、筆者のここまでの研究成果によれば、茶湯への個人の志向的な思いイコール道を基礎づけたのは、禅の「不立文字、以

心伝心」と「一道に志深」という修行心であった。また、茶湯の「師匠」となるのに必要な資質・資格である「数寄覚悟」は、尼ヶ崎の見解と同じく、身分の貴賤・上下に関わらず個人の追求・趣味といえる。だが、「師匠」となる者の立場は、より根本的には、「古唐物を多く見て、上手の茶湯者と節々参会をなし、作分出だし、昼夜茶湯に数寄覚悟、これ師匠なり」と記述されるように、茶湯の真髓を心で捉え伝達する深い精神性と術といえるのである。

「師匠」の真髓は、つかんだ「不立文字」としての茶湯の道（真髓）を「以心伝心」することであり、「名人」の真髓は「一道に志深」とであるとされる。いずれも禅思想に深くつながりをもつものである。この点で、茶湯の「道」の根柢は禅にあるといえる。これらの見方において、尼ヶ崎のいう「身分の貴賤」や「個人の趣味」は、茶人の修行に関わる一つの前提と見ることができるが、茶湯・「名人」・「師匠」の本質である禅の「道」の観点に照らすとき、その定義は不十分であると思われる。

注

- 1) 『利休の黒―美の思想史』（尼ヶ崎彬、花鳥社、2022年）、93頁。
- 2) 同上、94頁。
- 3) ⑪と⑫のテキストは「雲州岩屋寺宛」（『山上宗二記 付茶話指月集』、熊倉功夫校注 岩波文庫、2006年）からの引用であり、「皆川山城守宛」版（『山上宗二の世界』、渡辺誠一、河原書店、1996年）では、⑪と⑫の引用文が見られない。以下に、『山上宗二記 付茶話指月集』を『宗二記』と略する。
- 4) 『宗二記』、222 - 223 頁
- 5) 同上、13 - 14 頁
- 6) 『山上宗二記 現代語でさらりと読む茶の古典』（竹内順一、淡交社、2018年）、19 - 20 頁

- 7) 『山上宗二の世界』（渡辺誠一、河原書店、1996年）、5 - 6 頁
- 8) 『山上宗二記 現代語全文完訳』（水野聡訳、能文社、2006年）、13 頁
- 9) 『山上宗二記を読む』（筒井紘一、淡交社、1987年）、22 - 23 頁
- 10) 『山上宗二の世界』（河原書店、1996年）では、渡辺誠一は「古今の唐物を集め、名物ばかりを飾って楽しむ人々を、大名茶の湯者と言う」と、「全ク」を「ばかり」と訳している。
- 11) 恐らく、熊倉が「数寄人」を一つの名詞、つまり茶人とされているだろうか。とすれば、動詞が示される言葉はないため、「読点」を付け加えた。
- 12) 「目聞きの茶湯も上手にて」の「の」が「所属」の意味か、「同格」の意味かについて説明する。

所属の場合では、「目利きの茶湯も上手」と翻訳する。同格の意味に取るなら、「道具の目利きは上手、茶湯も上手」と訳する。ただ、「名仁」には「目モ聞キ茶ノ湯モ上手」という表現があり、「目聞き」と「茶湯も上手」が二つの条件として列挙されることが明らかである。したがって、「の」を同格の意味に取り、「目利きはでき、茶湯も上手だ」と解釈することが適切だと考える。
- 13) 「世上数寄の師匠」の「数寄」は一般の茶人や茶湯を指している。
- 14) 『新版茶道大辞典』（淡交社、2010年、480頁）は「作意」を「創意工夫のこと。作分ともいう」と解釈する。
- 15) 『宗二記』、89 頁
- 16) 『古語大辞典』（第四巻、角川書店）、527 頁
- 17) 「名仁」の「仁」には儒学の「仁」という解釈もあるが、この文脈では、「人」という意味であると考えられる。

『古語辞書』（第十版、旺文社、703頁）によれば、「仁」には①「儒教で、「五常」の一。親に親しむ自然の情を万人に及ぼしたもの。儒教で説く最高の徳で、人道の根本をなす」、②「人。人物」という二つの意味がある。

『山上宗二記』における茶湯の「道」の概念について

『邦訳 日葡辞書』（岩波書店、1980 年、362 頁）によれば、①「人」、②「日本人およびシナ人が、すぐれた道徳的習慣、あるいは、美点であるとする五つの徳目の一つ、それは、他人に同情し、他人を愛するが、自分の身および自分の身に関する事などは忘れて、他人を助けることにある」と解釈されている。

以上の二つの辞書では、「仁」についての解釈がほぼ同じであるが、元の文脈において「仁」が「茶人」を指すため、「人」の意味に解釈される。

18) 『宗二記』、342 頁

19) 同上、14 - 15 頁

20) 同上、14 頁

21) 同上、99 頁

22) 『宗二記』、10 - 11 頁

23) 同上、14 頁

24) 同上、15 頁

25) 同上、301 頁

26) 同上、103 頁

27) 同上、301 - 302 頁

28) 同上、103 頁

29) 「拙子」は宗二自身を指しているが、文脈からは、宗二に相談する主体が明確には示されていない。ただ、『山上宗二記 現代語でさらりと読む茶の古典』では、「先年、あなた様（雲州・岩屋寺の住職・快慶）が、拙子（わたくし）に茶の湯について相談されたとき」とあり、竹内は岩屋寺の住職・快慶として解釈されている。

30) 『宗二記』、301 - 302 頁

31) 同上、103 - 104 頁

32) 『山上宗二記 現代語全文完訳』、115 - 116 頁

33) 『山上宗二記現代語でさらりと読む茶の古典』、201 頁

34) 『山上宗二の世界』、72 頁

渡辺の翻刻した「奥書」では、⑪「此道之奥之奥」と⑫「宗程様御数寄道御執心」という記述が見られない。その代わりに、「其上御茶湯道為直々深重御懇望 如先師已来 法度寶印ニ御血判之御誓詞被下條 如此候 行末粉骨碎身於 御志積者 口伝密伝 第一目聞之大事悉可申上候」という一文（下線部分）がある。そこにおいて、師匠からの伝達が表れている。

35) 筒井絃一は『山上宗二記を読む』の「解題」の部分では、文献学の立場から、諸写本の「奥書」を比較したが、その現代語訳および思想的な考察を行っていない。

36) 『宗二記』、13 頁

37) 渡辺の現代語訳では、「茶の湯数寄」は茶の湯という意味であるか。

38) 同上、13 頁

39) 同上、13 頁

40) 同上、11 頁

41) 竹内の訳版では、「茶の湯をマスターした者には、文字で書かれたものは不用になる、と喩えられている通りです」とあるように、茶湯のマスターした者は熟練人あるいは上手な茶人である。しかし、元の文脈は茶人ではなく、茶湯の真髓が語られている。水野の訳版では重要な言葉である「月」と「指」が解釈されていない。

42) 『宗二記』、104 頁

43) 同上、102 頁

The Concept of the 'Way' of Chanoyu in the "Yamanoue no Soujiki"

Qing Ji

Graduate School of Letters (Doctor's Degree Program)

Hiroshima University

In this study, we explore the concept of 'Tao' (The Way) as exemplified in "Yamanoue no Soujiki" (Records of Chanoyu Sogen), focusing on the notions of 'Ichido' (One Way) and 'Rakudo' (Way of Enjoyment) regarding the 'Origin of Chanoyu'. We discuss their significance in relation to the spiritual and mental cultivation in Zen practice. Furthermore, we delve into the concepts of 'Suki-do' (Way of the Teahouse) and 'Kono Michi no Oku no Oku' (The Deepest Depths of This Way), which enriches our understanding of the discourse and leads to a deeper exploration of the technical aspects of the Way of Tea. Additionally, this study defines and explains the sufficient and necessary conditions for the concept of 'Tao' as described in "Yamanoue no Soujiki".